



被災地へボランティアへ行く岩大生の皆さんへ

1. 何よりも大切なこと それは、あなたが安全で無事に 帰ってくることです。

例えば、あなたがひとりの尊い命を救って喜びがひとつ増えたとしても、あなたの身に何かあれば、助けられた人、あなたの帰りを待っている人、ふたつの悲しみが増えてしまいます。だから、どんなときでも、第一に自らの安全と、無事に帰ることを考えて行動してください。

どんなときでも単独行動は避けて、2人あるいは3人以上のチームで行動してください。夜の場合は、それより多い人数で行動してください。活動中、余震に遭ったりケガをしたり、何かあったりしても、複数人いれば、お互いに助け合ったり、良い知恵が浮かんだり、対処できます。

だから、ちょっとしたお手伝いのときでも、チームみんなで行動しましょう。

同じように、トイレや入浴などへ行くときも、声をかけ合いましょう。被災地の方であるかボランティアであるかや、年齢に関係なく、「一緒に行きませんか」と誘い合えば、その一言が話のきっかけになり、ふさがちな心に安心感を生み、さらに、つながりを強めます。

2. だから、どんなときも ひとりにならない ひとりで行動しないでください。

3. ひとりでいる子どもや大人を見たら 声をかけてみましょう。

「こんにちは！」「大丈夫？」「何かできることはありますか？」「あっちにみんないるから行こうよ！」—ふさわしい言葉はその時々で違うかも知れないけれど、ひとりでいる子どもや大人を「独り」にさせないよう、声をかけ合いましょう。

子どもは、問題や不安を表現するのが上手でなかったり、さまざまなサポートや支えを必要としていたりする可能性があります。どんな支えが必要か分からなくても、特に、ひとりでいる子どもには、いろいろと声をかけてあげてください。

「あのとき声をかけてくれたから…」—声をかけてもらった子どもは、いつまでもそのことを支えとして覚えていられます。

どこかに行くときは、必ず、行先と帰りの時間を周囲の人に伝えましょう。あなたがいつもどんなことをしているのか分かれば、ボランティア仲間も安心です。被災者の方も親近感がわいて、頼りやすくなります。万が一何かあった場合は、迅速に対応したり、助けに行ったりできます。

また、嬉しかったこと、不安に思ったこと、疑問に思ったことなど、自分の中に溜め込まないで、周囲の人に話し、共有しましょう。何かよいアイデアや対応策など生まれるかもしれません。

怖かったことなども、もちろん、自分の中に溜め込まず、まずは周囲の人に話してみましょ。あなたが情報を共有してくれることで、ほかの人が危険を回避し、被害を未然に防ぐことができるかもしれません。

4. 気持ちや情報を共有しましょう。

助産師の専門職能団体「日本助産師会岩手県支部」では、阪神・淡路大震災、新潟中越地震を経験した多くの女性たちの声から、避難所で女性（小学生などの小さな子を含む）に対する**性暴力**や**セクシュアルハラスメント**が多数発生したことが報告されたとして、**女性自身や、子の保護者、周囲の大人に対して「注意をし、行動」**するよう呼びかけています。

東日本大震災支援全国ネットワークでは、**東北関東大震災・災害ボランティア・活動ガイドライン**を作成しています。**被災地に行く前・着いてから・帰るときの重要なポイント**が書かれています。できるだけ確認の上、ボランティアに臨んでください。

http://www.jpn-civil.net/support/volunteer/post_3.html

何かあったり迷ったときは、まず相談してください。

<岩手大学男女共同参画推進室>

盛岡市上田3丁目18-8 TEL: 019-621-6998 E-MAIL: equality@iwate-u.ac.jp

※このチラシは、NPO法人 参画プランニング・いわてのご協力により作成しました。